

平面アニメーション領域ゼミ
アニメーション作家論
2月10日提出

再構成されていく世界

イタリアのアニメーション作家・トッカフォンド

東京藝術大学映像研究科アニメーション専攻
北村愛子

ジャン・ルイジ・トッカフォンドの作品を見る度に、わたしはいつも非常にアニメーションに特化している映像だと驚かされる。画面の使い方や手法だけでなく時間の使い方、テーマの見せ方においてアニメーションでしかできないことを彼はさらりとやってのける。彼はイタリアのサンマリノに生まれて、短編アニメーション作家として活躍し、カンヌ、ベルリン、ヴェネチアの映画祭で数多くの賞を受賞している作家である。

トッカフォンドの作品の特徴は、実写をベースとして伸びたり縮んだりするアニメーション手法である。彼の技法は実写がベースといってもロトスコープなどのように、実写の動きを模倣するのではない。既存の実写映画や、自ら映した写真・実写映像を再構築させるコラージュ・フィルムをベースにし、これをもう一度コピー機にかけ直すことで、伸びたり縮んだりする動きを無作為に作り出している、非常に独特な手法でアニメーションを描く。彼の手法を知る上で、彼のデビュー作である「しっぽ」(1989)という作品は彼の作風の実験段階として、非常に興味深い作品だ。この作品は、三大喜劇王の一人、バスター・キートンの映画をベースにしている。まずテレビの画面に映るキートンが示される。トッカフォンドはテレビに映った映画を写真で撮影し、それを拡大して印刷し、その上から描いていく。この作品の冒頭では、それがよく見てとれる。そして、キートンはこの作品の中でテレビ画面の枠を軽々と超えて、逃げていく。逃げたかと思うと、またテレビの枠に捉えられる。その次にレタッチだけでなく、トッカフォンドの絵の要素がどんどんと取り込まれていく。白黒の世界から、遊びの世界へ招かれる。トッカフォンドはこの作品の中で絵や画面だけでなく、時間の操作の実験も行っている。通常の早さから、遅い速度、そして逆再生と、実験的に様々な時間の形態が積み重ねられていく。このように「しっぽ」という作品は彼のデビュー作でありながら、彼のその後の形態に大きく影響を与える実験が繰り返されて完成したことがよくわかる作品である。そして、彼の作風のキーワードである子供っぽさ、無垢できまぐれで残酷な少年時代を想起させる作品である。

「ダンス・フロアー」(1991)という作品も同じように実験色の強い初期の作品である。この作品はフレッド・アステアとジンジャー・ロジャーズの映画をベースに使い、また、マクラーレンが実験したような、ダイレクト・ペイント・オン・フィルム、踊る男女の形そのものをコラージュした技法を試している。音楽に合わせながら、レタッチしていくことと、時間を操作することを同時に

行い、デフォルメ、メタモルフォーゼが繰り返される。この作品で二人はぎゅーんと離れたり、ぴったりくっついたりしながら、踊り、愛を育む。そしてメリーゴーランドのように全てが回りだし、踊り出す。そして最後は動物たちが出てきてダンスの行進で幕が閉じる。この作品はトッカフォンドの作風のキーワードである愛とダンスについて描かれている。

「豚のダンス」(1992)は、初期の作品で実験質の濃い作品だが、この作品は後の「犯罪」や「ピノキオ」ともつながるテーマ性に挑んだ作品だと言える。ダンスというトピックは同じだが、この作品はダンスホールとは一転し、愛情などよりもむしろ、「しっぽ」などで見られる奔放さと残酷さ、そして死についてのキーワードが強く想起される作品である。古く白い障壁に囲まれた部屋から、豚が一匹逃げ出していく。長く引き延ばされた黒い染みが管のようになり、外に出た豚は自由に走り回っていくが、とうとう捕まって、またあの部屋に戻される。この白い部屋で豚は屠殺されてしまう。しかしトッカフォンドはこの死をただ淡々とリズムに合わせて語っていく。ダンスと言いながら鬱的で、死について語りながら、無垢できまぐれである。

「犯罪」(1992)という作品は、それまでの実験的な作品から抜け出している作品だと思う。ダークな側面で描かれ、ギャング映画やフィルム・ノワールの作品をベースに使用し、犯罪者のモンタージュ写真などにレタッチを施して、再構成されている作品である。黒と黄色をベースに危険な町中の世界が映し出されていく。人々はこうもあっさりと殺され、まるで現実味がない。逃げ惑う人は、例えば蜘蛛の巣にひっかかるように捕らわれ、倒れていく。「豚のダンス」の頃から、この作品にかけて、トッカフォンドは映画や様々な映像のマテリアルをベースに、物語を再構築しようとしている。ただ、それは非常に断片的な欠片を集めて行われるために、難解に感じるかもしれない。

トッカフォンドの作品は、元々あった素材や世界をアニメーションという技法を使って再構成していくおもしろさがある。そして伸びたり縮んだりする動きや、一見とりとめのないショットのつながりは夢の中やあやふやな記憶の断片を想起させる。これは画面だけでなく、時間をも彼が再構成していることを示している。現実的な時間の流れではない時間を構築するのに、一コマ一コマ操作することができるアニメーションはとても適しているのだが、トッカフォンドはこうしたアニメーションの特質を巧みに使いこなす。実験性の高かった初期の作品と比べて、「犯罪」以降の作品はそうした意味でも、力強い作品とな

っていく。

「ピノキオ」(1999) は、それまでの実験を集結させた作品だ。そして、この「ピノキオ」がイタリアの作家・カルロ・コッローディによって書かれた作品で、トッカフォンドがイタリア人であることからイタリアという国の特質とも言えるかもしれないが、この「ピノキオ」という作品にトッカフォンドが出会ったことは偶然でありながら、必然的な出会いとも思えるのである。グラグラと変容するピノッキオの顔から始まり、「しっぽ」でも使用されているバスター・キートンの動きにピノキオの姿が投影される。ピノキオの無垢でありながら残酷で自分勝手な姿は「しっぽ」で再構成されたバスター・キートンと重なるところが多い。しかしこの作品の本質はこうしたユーモアのある動きだけではない。主人公が金のなる木に吊されて死んでしまうエピソードも埋め込まれていて、これは原作の「ピノキオの冒険」に則っている。この作品は、ただ朗らかで甘い童話の世界を描いたのではない。陰湿でいて魅惑的な動きと登場人物と、鬱的で悪夢のような物語が入り交じって構成されている。トッカフォンドを通して再構成されたこの「ピノキオ」は、一見とりとめなく自由奔放で、きまぐれな子供の世界に見えて、その実、その断片を細かく追っていくと、「死」、「生」、といった人間の根源的な部分をより一層意識させる内容となっている。

「生きていても死んでいても同じこと」(2000) は、イタリアの映画監督で詩人でもあるピエル・パオロ・パゾリーニの 25 周年忌を記念して企画された制作の一つとして作られた。パゾリーニの詩を題材として、彼の映画やトッカフォンドがよく使うマテリアルをベースにしつつ構成されている。この作品は企画されて作られた経緯はあるものの、「ピノキオ」までに培われたトッカフォンドの作品の共通するテーマに見事に一致する。彼の作品の多くは何かから逃れようとしつつも、やはり逃れられないそれぞれの性(サガ)について語っている。例えば「しっぽ」では、テレビの枠や時間の枠から逃げだそうとするバスター・キートンをとらえ、「豚のダンス」では逃れられないこの豚の運命について語り、「ピノキオ」でもピノキオの逃れられない運命について語られていた。「生きていても死んでいても同じこと」は、パゾリーニの言葉であるが、この作品は、生きようが死のうが逃れられない人間の性について語っているように思う。この鬱的な作品の中で、橋から海に飛び降りて自殺した男性は大きな手によって連れ出され、彼の記憶の中を浮遊する。愛があり、笑顔があり、ダンスがあり、別れがあった。死してなお、彼は逃げていたが、操り人形の糸に捕らわれてし

まう。そして最後は海に戻ってきたのだろうか？それとも空を浮遊しているのだろうか？彼は地上に戻ってきて猿に変えられる。生きていても死んでいても、人間に与えられた性は私達の中から消えることはない。トッカフォンドは決してこの逃れられない性（サガ）を悲観などという安易な形で描いていない。この作品においてはそういった性を祝福しているようにも見受けられる。

「小さなロシア」（2004）は、父がウサギを殺して母が料理する様子を見た少年が、そのトラウマから大人へ成長した時、売春婦を殺し、父と母も殺してしまうというショッキングな内容である。トッカフォンドはこの作品を通して写真を再構成しながら、人間の狂気に挑んでいる。母の愛、少女への興味、女性への性愛、そして孤独。エロティックで奔放に描かれたアニメーションで綴られるが、人間の心に根付く残酷な性について力強く語られた作品だ。

トッカフォンドの技法は、以上のように過去にあった様々な映画の一部や、写真や、そういった実写の世界と実際の時間を再構成する。この再構成された世界は、現実なのか、記憶なのか、夢なのか、とらえどころのない曖昧な時間軸によって断片的に構成されているところが特徴だ。そして生きているものが持つ、逃れられない性を彼は描き出す。しかしそれは私達にとって必要で、生きるためにはなくてはならないものだ。そんな理不尽な生き物の性をそしてトッカフォンドを通じて再構成された世界では強く意識させられるのである。

（北村愛子）

参考資料

コンテンプラリーにメーション入門・12月6日・トッカフォンドの誘惑
（山村浩二、イラン・グエンによる講座から）
（添付資料/クリス・ロビンソン、土居伸彰）